

# 半七捕物帳

雪達磨

岡本綺堂

青空文庫



改めて云うまでもないが、ここに紹介している幾種の探偵ものがたりに、何等かの特色があるとすれば、それは普通の探偵的興味以外に、これらの物語の背景をなしている江戸のおもかげの幾分をうかがい得られるという点にあらねばならない。わたしも注意して、半七老人の談話筆記をなるべく書き誤らないように努めているつもりであるが、その説明がやはり不十分のために、往々にして読者の惑いを惹き起す場合がないとは限らない。

これらの物語について、こういう不審をいなく人のある事をし

ばしば聴いた。それは岡っ引の半七が自分の縄張りの神田以外に踏み出して働くことである。岡っ引にはめいめいの持ち場がある。それをむやみに踏み越えて、諸方で活動するのは嘘らしいというのである。それは確かにごもつとも理窟で、岡っ引は原則として自分だけの縄張り内を守っているべきである。仲間の義理としても、他の縄張りをあらすのは遠慮しなければならぬ。しかし他の縄張りを絶対に荒らしてはならないというほどの窮屈な規則も約束もない。今日でも某区内の犯罪者が他区の警察の手にあげられる場合もある。まして江戸の時代に於いて、たがいに功名をあらそう此の種の職業者に対して、絶対にその職務執行範囲を制限するなどは所詮<sup>しよせん</sup>できないことではない。半七がどこへ出しやば

つても、それは嘘でないと思つて貰いたい。

「これはわたくしの縄張り内ですから、威張つて話せますよ」と、半七老人が笑いながら話し出したのは、左の昔の話である。

文久元年の冬には、江戸に一度も雪が降らなかつた。冬じゆうに少しも雪を見ないというのは、殆ど前代未聞の奇蹟であるかのように、江戸の人々が不思議がつて云いはやしていると、その埋め合わせというのか、あくる年の文久二年の春には、正月の元旦から大雪がふり出して、三ガ日の間ふり通した結果は、八百八町を真つ白に埋めてしまった。

故老の口碑によると、この雪は三尺も積つたと伝えられている。

江戸で三尺の雪——それは余ほど割引きをして聞かなければならないが、ともかくも其の雪が正月の二十日頃まで消え残っていたというのから推し量ると、かなりの多量であったことは想像するに難くない。少なくとも江戸に於いては、近年未曾有の大雪であったに相違ない。

それほどの大雪にうずめられている間に、のん気な江戸の人達は、たとい回礼に出ることを怠つても、雪達磨をこしらえることを忘れなかった。諸方の辻々には思い思いの意匠を凝らした雪達磨が、申し合わせたように炭団たどんの大きい眼をむいて座禅をくんでいた。ことに今年はその材料が豊富であるので、場所によつては見あげるばかりの大達磨が、雪解け路に行き悩んでいる往来の人

々を睥睨しながら坐り込んでいた。

しかもそれらの大小達磨は、いつまでも大江戸のまん中にのさばり返つて存在することを許されなかつた。七草も過ぎ、蔵開きの十一日も過ぎてくると、かれらの影もだんだんに薄れて、日あたりの向きによつて頭の上から融けて来るのもあつた。肩のあたりから頰くずれて来るのもあつた。腰のぬけたのもあつた。こうして惨みじめな、みにくい姿を晒さらしながら、黒い眼玉ばかりを形見に残して、かれらの白いかげは大江戸の巷ちまたから一つ一つ消えて行つた。その消えてゆく運命を荷になつている雪達磨のうちでも、日かげに陣取つていたものは比較的ひよに長い寿命を保つことが出来た。一つ橋門外の二番御火除ひよけ地の隅いすわに居据つている雪だるまも、一方に

曲木家まがきの御用屋敷を折り廻しているので、正月の十五日頃までは満足けいがいにその形骸を保っていたが、藪入りも過ぎた十七日には朝から寒さが俄かにゆるんだので、もう堪まらなくなつて脆もろくもその形をくずしはじめた。これは高さ六、七尺の大きいものであつたが、それがだんだんとくずれ出すと共に、その白いかたまりの底には更にひとりの人間があたかも座禅を組んだような形をしているのが見いだされた。

「や、雪達磨のなかに人間が埋まっていた」

この噂がそれからそれへと拡がって、近所の者どもはこの雪達磨のまわりに集まつた。雪のなかに坐つていたのは四十二三の男で、さのみ見苦しからぬ服装みなりをしていたが、江戸の人間でないこ



とはすぐに覺さとられた。男の死骸しがいは辻番から更に近所の自身番に運ばれて、町奉行所から出張した与力同心の検視をうけた。

男のからだには致命傷ちめいしょうとも見るべき傷のあとは認められなかった。刃物で傷つけたような跡もなかった。絞め殺したような痕あとも見えなかった。寒気のために凍死したのか、あるいは病気のために行き倒れとなったのかと、役人たちの意見はまちまちであったが、普通の凍死か行き倒れであるならば、雪達磨のなかに押し込まれている筈がない。これを発見した者はすぐに辻番か自身番へ届けいづべきである。これほどの大きい雪達磨をわざわざこしらえて、そのなかに死骸を忍ばせておく以上、それには何かの仔細こまがなければならぬ。彼の死因には何かの秘密がまつわつてい

るものと、役人たちは最後の断案をくださった。

「それにしても、この雪達磨を誰が作ったのか」

役人たちは当然の順序として、まずその詮議せんぎに取りかかった。

町内の者もことごとく吟味をうけたが、誰もこの雪達磨を作ったと白状する者はなかった。かれらの申し立てによると、この雪達磨は三日の夜のうちに何者にか作られたのであるが、前にもいう通り、雪が降れば誰かの手に依って必ず一つや二つの雪達磨は作られるのであるから、この大きい雪達磨が一夜のうちに出現したのをみても、誰も別に怪しむものもなかった。おおかた町内の誰かが拵こしらえたのであろうぐらいに思つて、なんの注意も払わずに幾日ですごしたのであった。殊にこの近所には武家屋敷が多いので、

それは町人がこしらえたのか、武家の若い者どもが作ったのか、それすらも確かには判らなかつた。

勿論これほどの雪達磨が自然に湧き出してくる筈はない。必ずその製作者はどこにか潜<sup>ひそ</sup>んでいるには相違ないのであるが、こうなつては誰も名乗つて出るものもない。なにかの手がかりを見付け出すために、達磨は無残に突きくずされて其の形骸は滅茶苦茶に破壊されてしまつたが、男の死骸以外にはなんの新らしい発見もないらしかつた。くずれた雪はその証跡を堙<sup>いんめつ</sup>滅せんとするかのうちに次第々々に消え失せて、いたずらに泥水となつて流れ去つた。

「旦那がた、御苦労さまでございます」

ひとりの男が自身番のまえに浅黒い顔を出した。かれは三河町の半七であった。八丁堀同心の三浦真五郎は待ち兼ねたように声をかけた。

「おお、半七、遅いな。貴様の縄張り内で飛んでもないことが始まったぞ」

「それを聞くと、わたくしもびつくりしました。で、もう大抵お調べも届きましたか」

「いや、ちつとも見当が付かない。死骸はここにある。よく見てくれ」

「ごめんください」

半七はすすみ寄って、そこに横たえてある男の死骸をのぞいた。

男は手織り縞の綿衣わたいれをきて、鉄色木綿の石持こくもちの羽織をかさねていた。履物はどうしてしまったのか、彼は跣足はだしであつた。半七は丁寧ていねいに死骸をあらためたが、やはり何処にも致命傷らしいあつたを発見することが出来なかつた。

「どうも判りませんね」と、彼も眉をよせた。「まあ、ともかくも其の現場を見とどけてまいりましょう」

役人たちに会釈えしやくして、半七は雪達磨の融けたあとを尋ねて行つた。そこらには雪どけの泥水と、さんざんに踏みあらした下駄の痕とが残っているばかりで、近所の子供や往来の人達がそれを遠巻きにして何かひそひそとささやき合つていた。その雑沓ざつとくをかき分けて、半七は足駄あしだを吸いこまれるような泥水のなかへ踏み

込んだ。そうして、油断なくその眼を働かせているうちに、彼はまだ幾らか消え残っている雪と泥との間から何物をか発見したらしく、身をかがめてじつと眺めていた。

彼はそれから少<sup>しばらく</sup>時<sup>とき</sup>そこらを獵<sup>あさ</sup>っていたが、ほかにはなんにも新らしい発見もなかったらしく、泥によごれた手先をふところの手拭で拭きながら、もとの自身番へ引つ返してゆくと、与力ももう引き揚げて、当番の同心三浦だけが残っていた。

「どうだ、半七。なにか掘り出したか。しつかり頼むぜ。質<sup>たち</sup>の悪い旗本か御家人どもの仕業<sup>しわざ</sup>じゃあねえかな」

「そうですね」と、半七もかんがえていた。「まあ、どうにかなるかも知れませんが、どうぞ明日<sup>あした</sup>までお待ちください」

「あしたまで……」と、真五郎は笑った。「そう安受け合いが出るかな」

「まあ、せいぜい働いてみましょう」

「では、くれぐれも頼むぞ」

云い渡して真五郎は帰った。そのあとで、半七は再び死骸たもとの袂たもとを丁寧にあらためた。

## 二

半七はそれから日本橋の馬喰町ばくろちようへ行つた。死骸みなりの服装みなりからか  
んがえて、まず馬喰町の宿屋を一応調べてみるのが正当の順序で

あつた。その隣り町ちように菊一という小間物屋があつて、麴町の大通りの菊一と共に、下町したまちでは有名な老舗しにせとして知られていた。半七は顔を識しつてゐる番頭をよび出して、この三日の日に南京玉なんきんだまを買いに來た田舎の人はなかつたかと訊いた。

繁昌の店であるから朝から晩まで客の絶え間はない。したがつて南京玉を売つたぐらいのお客を一々記憶していることは困難であつたが、幸いに当日が正月早々であるのと、かの大雪が降りつづいたのとで、殆ど商売は休み同様であつたために、菊一の番頭はその日に買物に來たたった三人の客をよく記憶していた。その二人は近所の娘で、他のひとりとは馬喰町の信濃屋という宿屋に泊まつてゐる客であつたと彼は説明した。



「名は知りませんが、去年の暮にも一度来て、村の土産みやげにするのだと云つて油や元結もつといなどを買つて行つたことがあります。三日の朝にも雪の降るのにやつて来て、どうしてもあしたは発たたなければならぬから、近所の子供たちの土産にするのだと云つて、南京玉を二百文買つて行きました」

その田舎の人の人相や年頃や服装などをくわしく聞きただして、半七は更に信濃屋に足をむけた。信濃屋の番頭は宿帳をしらべて、その客は上州太田の在ざいの百姓甚右衛門四十二歳で、去年の暮の二十四日から逗とうりゆう留りゆうしていた。どうしても年内には帰らなければならぬと云つていたが、それがだんだんに延びてとうとうここで年を越すことになった。三ガ日がすんで、四日の日は是非たつ

と云っていたが、その前日の午ひるすぎに近所へ買物にゆくと云つて出たぎり帰つてこないの、宿の方でも心配している。尤も去年もつとじゅうの宿賃は大晦日おおみそかの晩に綺麗に勘定をすませてあるので、その後の分は知れたものではあるが、ともかくも無断でどこへか形を隠してしまうのはおかしいと、帳場でも毎日その噂をしていくとのことであつた。

「じゃあ、気の毒だが神田まで来てくれ。なに、決して迷惑はかけねえから」

迷惑そうな顔をしている番頭を引つ張り出して、半七は彼を神田の自身番へ連れて行つた。番頭はその死骸を見せられて、たしかにそれは自分の宿に三日まで泊まっていた甚右衛門という田舎

客に相違ないと申し立てた。これで先ず死人の身許みもとは判ったが、かれが何者に連れ出されて、どうして殺されたかということとは些ちつとも想像が付かなかつた。

半七が菊一へ詮議に行つたのは、雪達磨のとけている現場で南京玉を三つ四つ発見したからであつた。近所の娘子供が落としたものか、あるいは死人の所持品かと、半七は自身番へ引つ返して死人の袂を丁寧にあらためると、袂の底からたつた一と粒の南京玉が発見されたので、かれが南京玉の持主であつたことは確かめられた。四十以上の田舎者らしい男が南京玉などを持つてゐる筈がないから、おそらく何処かの子供にでもやるつもりで袂のなかに入れて置いたものであろうと半七は鑑定した。

勿論その南京玉をどうして手に入れたのか、買ったのか貰ったのか、ちつとも見当は付かないのであるが、仮りに先ずそれを買ったものとして、半七はその買い先をかんがえた。もともと子供の玩具おもちゃ同様のものであるから、どこで買ったか殆ど雲をつかむような尋ね物であつたが、田舎の人は詰まらないものを買うにも、とかく暖簾のれんの古い店をえらむ癖があるので、かれは先ず馬喰町の近所で最も名高い小間物屋に眼をつけて、案外に安々とその手がかりを探り出すことが出来たのであつた。

「ここまででは巧く運んだが、この先がむずかしい」と、彼は又しばらく考えていた。

「もうわたくしは引き取りましてもよろしゅうございませうか」

と、信濃屋の番頭はおずおず訊きいた。

「むむ、御苦労。もう用は済んだ」と、半七は云った。「いや、少し待ってくれ。まだ訊きてえことがある。一体この甚右衛門という男はなんの用で江戸へ来ていたのか、おまえ達はなんにも知らねえか」

「ふだんから寡口むくちな人で、わたくし共とも朝夕の挨拶をいたすほかには、なんにも口を利いたことがございませんので、どんな用のある人か一向に存じません」

「定じょうやど宿かえ」

「去年九月頃にも十日ほど逗留していたことがございまして、今度は二度目でございます」

「酒をのむかえ」と、半七は又訊いた。

「はい。飲むと申しても毎晩一合ずつときまつて居りまして、ひどく酔っているような様子を見かけたこともございませでした」

「誰かたずねて来ることはあつたかえ」

「さあ、誰もたずねて来た人はないようです。朝は大抵五ツ（午前八時）頃に起きまして、午飯を食うといつでも何処へか出て行くようでございました」

「五ツ……」と半七は首をかしげた。「田舎の人にしては朝寝だな。そうして何時なんどきに帰ってくる」

「大抵夕六ツ（六時）頃には一度帰つて来まして、夜食をたべると又すぐに出て行きますが、それでも四ツ（午後十時）すぎには

きつと帰りました。なんでも近所の寄席よせでも聴きに行くような様子でしたが、確かなことは判りません」

「金は持つていたらしいかえ」

「宿へ初めて着きました時に、帳場に五両あずけまして、おおみそ大晦日かには其の中から取ってくれと申しました。その残金はわたくし共の方に確かにあずかってございますが、自分のふところには

どのくらい持つていましたか、それはどうも判り兼ねます」

「外から帰ってくる時には、いつも手ぶらで帰ったかえ」

「いいえ、いつも何か風呂敷包みを重そうに提げていました。村への土産をいろいろと買いあつめているらしいと女中どもは申しましたが、どんなものを買って来るのか、ついぞ訊いて見た

「こともございませんでした」

「そうか。じゃあ、おめえの家うちへ行つてその座敷をあらためて見よう」

半七は番頭をつれて、再び信濃屋へ引つ返した。番頭に案内されて、奥二階の六畳の座敷へはいると、そこには別に眼につく物もなかった。更に戸棚をあけてみると、いろいろの風呂敷に包んだものが細紐で十文字に固く縛られて、五つ六つ積みかさねてあった。その一と包みを念のために抽ひき出すと、それは可なりの目方があつて、なんだか小砂利こじやりでも包んであるかのように感じられた。番頭立会いでその風呂敷を解いてみると、中からは麻袋や小切れにつつんだ南京玉がたくさんあらわれた。



「何だつてこんなに南京玉を買いあつめたのでしよう」と、番頭も呆あきれていた。

どの風呂敷包みからも南京玉が続々あらわれて来たので、半七もさすがにおどろいた。

「なんぼ土産にすると行って、こんなに南京玉を買いあつめる奴もあるめえ。商売にする気なら、どこかの問屋から纏まとめて仕入れる筈だ。割の高いのを承知で、店々から小買ひする筈はねえ。どうも判らねえな」

うず高い南京玉を眼のまえに積んで、半七は腕をくんでいたが、やがて思わず口の中であつと云つた。

## 三

「おい、番頭さん、まったく誰もこの男のところへ尋ねて来たことはねえかどうだか、もう一度よく考え出してくれねえか」と、半七は番頭に訊きいた。

「さあ、わたくしはどうも思い出せませんが、それでもわたくしの留守のあいだに誰か来たことがあるかも知れませんが、女中どもを一応調べてみましょう」

番頭は下へ降りて行ったが、やがて引つ返して来て、去年の暮の二十八日に隣り町ちようの豊吉という銕職人かざりが一度たずねて来たのを女中の一人が知っている。但しその時は甚右衛門は留守で、豊吉

はそれぎり尋ねて来ないということを報告した。

「その豊吉というのはどんな人間だえ」

「以前は小博奕こぼくちなどを打って、あまり評判のよくない男でございました」と、番頭は説明した。

「しかし去年の春頃からすっかり堅くなりましたして、商売の方も身を入れますので、この頃はふところ都合もよろしいようで、十一月には品川のお政という女郎をうけ出して、仲よく暮らして居ります」

「いくら品川でも女ひとりを請うけ出すには纏まとまった金がいる。多た寡かが銕職人が半年や一年稼いでも、それだけの金が出来そうもねえ。なにか金主があるな」

「そうでございましょうか」

「金主はきつとこの甚右衛門だ。もう大抵判っている。しかしこのことは滅多めったに云つちやあならねえぞ。この南京玉はおれが少し貰つて行く」

半七は一と掴みの南京玉を袂に入れて、信濃屋からすぐに隣り町の裏長屋をたずねると、鋳職人の豊吉は眉のあとの青い女房と、長火鉢の前で葱鮪ねぎまの鍋を突っ付きながら酒をのんでいた。

「おい、鋳屋の豊というのはお前か」

「そうでございます」と、豊吉はおとなしく答えた。

「少し用がある。そこまで来てくれ」

「どこへ行くんでございます」

豊吉の眼はにわかにか光った。

「まあ、なんでもいいから番屋まで来てくれ。すぐに帰してやるから」

「いけませんよ。親分」と、彼は早くも半七の身分を覚さとつたらし  
かった。「わたしは決して番屋へ連れて行かれるような覚えはあ  
りませんよ。何かのお間違いでしょう」

「強情だな。まあ素直に来いというのに……。ぐずぐずしている  
と為にならねえぞ」

「だって、親分。むやみにそんなことを云われちゃあ困ります。  
わたしはこれでも堅かたぎ気の職人でございます。なるほど、以前は御  
禁制の手なぐさみなんぞをやったこともあります。今じゃあ双

六の賽さいころだつて、搦なんだことはありません。まったく堅気になつたんでございますから、どうかお目こぼしを願います」

「まあ、いいや、そんなことは出るところへ出て云うがいい。なにしろお前に用があるから呼びに来たんだ。おれが呼ぶんじやねえ、これが呼ぶんだ」

彼の眼の前へつかみ出したのは、かの南京玉であつた。それを一と目みると、豊吉はもうなんにも云わないで、すぐに長火鉢の抽斗ひきだしをあけた。ふだんから忍ばせてある鯉節小刀をその抽斗から取り出して、彼はそれを逆手さかてに持つて起ちあがろうとする時、半七のつかんでいる南京玉は、青も緑も白も一度にみだれて彼の真向まっこうへさつと飛んで来た。

眼つぶしを食つて怯む<sup>ひる</sup>ところへ、半七は透かさず飛び込んでその刃物をたたき落とした。葱鮪の鍋の引つくり返つた灰神樂<sup>はいかぐら</sup>のなかで豊吉はもろくも縄にかかつて、町内の自身番へ引つ立てられた。

「やい、豊。てめえ、手むかいをする以上はもう覚悟しているんだらう。正直に何もかも云つてしまえ。てめえは信濃屋に泊まっている甚右衛門とどうして近付きになつた」と、半七はすぐに吟味にかかった。

「別に近付きというわけじゃありません。去年の暮に一度たずねて来て、なにか手文庫の錠前がこわれているから直してくれというので、宿屋に見に行きました。あいにく留守で、こつちも忙

がしいのでそれぎり行きませんが、その甚右衛門がどうか致しましたか」

「白らばつくれるな。さつき南京玉を見たときに、てめえはどうして顔の色を変えた。さあ、有ありてい体に申し立てろ。手前なんで甚右衛門を殺した。ほかにも同類があるだろう、みんな云つてしまえ」

「でも親分。無理ですよ。なんで私が甚右衛門を……。今もいう通り、たった一度しか逢つたことのない男をなんで殺す筈があるんです。察してください」と、豊吉は飽くまでも抗弁した。

「まだそんなことを云うか。おれが無理か無理でねえか、南京玉に聴いてみる」と、半七は睨み付けた。「てめえがいつまでも強



情を張るなら、おれの方から云つて聞かせる。あの甚右衛門という奴は正直な田舎者のように化けているが、あいつは確かに贖にせが金遣ねいだ」

豊吉の顔は藍のようになった。

「どうだ、凶星だろう」と、半七がたたみかけて云つた。「あいつが南京玉を買いあつめているのは贖金の金に使うつもりだ。あいつらのこしらえる贖金の地金は、貧乏徳利の欠片かけらを細かに摺すり潰つぶして使うんだが、それがこの頃はだんだん上手になつて、小さい南京玉をぶつ搔かいて地金にするということを俺はかねて聴いている。それも一軒の店で一度にたくさん買い込むと人の眼につくので、田舎者の振りをして方々の店から少しずつ買いあつめてい

たのに相違ねえ。てめえは鋳屋だ。あの甚右衛門とぐるになつて、贖金をこしらえる手伝いをしたろう。どうだ、これでもまだ白しらを切るか」

豊吉はまだ黙っていた。

「まだ云つて聞かせることがある」と、半七はあざ笑いながら云いつづけた。「てめえはいい女房を持っているな。あの女は幾らで品川から連れてきた。その金はどこで都合して来た。てめえ達が一年や半年、夜の目も寝ずに稼いだつて、女郎なんぞを請け出して来るほどの金はできねえ筈だ。その金はみんな甚右衛門から出ているんだらう」

ここまで問いつめられても、豊吉はまだ強情に口をあかないの

で、彼をひと先ず番屋につないで置いて、半七は更にその女房をよび出して、彼の家へふだん近しく出入りするものを調べた。その結果、おなじ職人の源次と勝五郎、四谷の酒屋播磨屋伝兵衛、青山の下駄屋石坂屋由兵衛、神田の鉄物屋近江屋九郎右衛門、麻布の米屋千倉屋長十郎の六人を召し捕つて、一々嚴重に吟味すると、果たして彼等一同共謀の贖金つかいであることが明白になった。

雪達磨の底にうずめられていた甚右衛門は、上州太田在の生まれであるが、今は一定の住所もないのである。

かれらが南京玉を原料として作りあげた贖金は専らもっぱ一分金と二分金とで、それを江戸でばかり遣つてしていると発覚の早いおそれが

あるので、甚右衛門は田舎者に化けて、旅から旅を渡りあるいて、巧みにそれを遣っていたのであつた。

それにしても甚右衛門を誰が殺したのか、それはまだ判らなかつた。

#### 四

贖金つかいは江戸時代の法として磔はりつけ刑の重罪である。かれら一同はどうで助からない命であるから、誰が甚右衛門を殺そうとも所詮は同じ罪であるものの、ともかくもその事情を明白にしておく必要があるので、一同は更にきびしい吟味をうけた。そうし

て、かれら七人のなかで雪達磨の一件に直接関係のあるのは、かの銕職かざりの豊吉と源次と、近江屋九郎右衛門と石坂屋由兵衛との四人であることが判った。

豊吉が品川から連れてきたお政という女は、もう年明け前ねんあでもあつたが、それでも何やかやで三十両ばかりの金があるので、豊吉は抱え主にたのんで先ず半金の十五両を入れて、女を自分の方へ引き取ることにした。のこる半金の十五両は去年の大晦日まで渡す約束であつたが、とてもその工面くめんは付かないので、彼は同類の甚右衛門にたのんだが、甚右衛門は素直に承知しなかつた。「おれのところへそんな事を云つて来るのは間違つている。神田の近江屋か石坂屋へ行け」と、かれは情すげなく跳ねつけた。

しかし近江屋へは今までたびたび無心に行っているので、豊吉もさすがに躊躇ちゆうちよした。よんどころなく品川の方へは泣きを入れて、七草の過ぎるまで待つて貰うことにしたが、豊吉自身の手では正月早々にその工面のつく筈はないので、かれは大雪の小降りになるのを待つて、三日ひるすぎに再び甚右衛門の宿へ訪ねてゆくと、町内の角であたかも彼の帰つてくるのに出逢つた。豊吉はよんどころない事情を訴えて、かさねて金の無心をたのむと、甚右衛門はやはり承知しなかった。それでも豊吉が執拗しつこく口説くので、甚右衛門も持て余したらしく、そんなら神田の近江屋へ行っておれが一緒に頼んでやろうということになって、二人は雪のなかを神田の鉄物屋まで出向いて行つた。

近江屋には同類の石坂屋由兵衛と鋸職の源次とが年始に来ていた。丁度いいところだと奥へ通されて、日の暮れるまで五人が酒をのんでいるうちに、甚右衛門は豊吉にたのまれた十五両のことを云い出すと、九郎右衛門も由兵衛もいやな顔をした。そして、そのくらいの金は甚右衛門が用立てるのが当然だと云った。この仕事については甚右衛門がふだんから一番余計に儲けているという不平話も出た。なにしろみんな酔っているのです、ふた言三言の云い争いからあわや腕ずくになろうとする一刹那に、どうしたのか甚右衛門はうんと唸ったまま倒れてしまった。四人もさすがにおどろいて介抱したが、もう蘇いきなかった。

「さあ、どうしよう」

四人は顔を見あわせた。頓死として正直にとどけて出れば論はないのであるが、彼等には何分にもうしろ暗いことがあるので、甚右衛門の死をなるべくは秘密に付してしまいたいと思った。四人は夜のふけるまで甚右衛門の死骸をそこに横たえて置いて、店の者の手前は正体なく酔っている彼を介抱して帰るように見せかけて、豊吉と源次はその死骸を肩にかけて出た。由兵衛も付き添って出た。主人の九郎右衛門もなんだか不安なので、これもそこからまで送ってゆく振りをして後から出て行った。

大雪の夜は更<sup>ふ</sup>けて、町には往来の絶えているのが彼等のためには仕合わせであった。四人は三、四町ほども死骸をはこび出して、堀端の火除け地に捨てようとしたが、なるべく一日でも後<sup>おく</sup>れて人



の眼につくことを考えて、かれらは協力してそこに大きな雪達磨を作った。そうして、甚右衛門の死骸をその底へ深く埋めて置いた。いつそ往来へ投げ出して置いたらば、凍死か行き倒れで済んだかも知れなかったのであったが、かれらの浅はかな知恵が却<sup>かえ</sup>つておのれに禍いして、思いもよらない悪事発覚の端緒を開いたのであった。

勿論、かれらは甚右衛門のふところや袂から証拠となるような品々をことごとく取り出してしまった。菊一で買った南京玉も無論取り出したのであったが、心が慌てているので其の幾粒かをこぼしたらしい。そうして、その南京玉が彼等を当然の運命に導いたのであった。

贖金つかいの商人あきんど四人と共謀の鋸職三人がすべて法のごとくに処刑されたのは云うまでもない。先に死んで刑戮けいりくをまぬかれ、た幸運の甚右衛門は、専ら旅先で贖金をつかつていたのであるが、他の商人四人は江戸市中で巧みに使用したことを白状した。

しかしその総高はまだ千両に上のほらなかつた。

# 青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（三）」 光文社文庫、光文社

1986（昭和61）年5月20日初版1刷発行

1997（平成9）年5月15日11刷発行

※旺文社文庫版を元に入力し、光文社文庫版に合わせて校正した。  
この過程で確認した、両者の相違を示す。

・なんぼ土産にするといつて「#旺文社文庫版「なんぼ土産にする  
るとかって」」

入力：網迫

校正：おのしげひこ

2000年7月6日公開

2004年2月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 半七捕物帳

雪達磨

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>